

県境・矢立峠探索

木村 治利



平成十三年十月二十日。和らぐ秋の陽をいっぱい浴びた岩木山が、津軽平野のど真ん中に、絵画のように浮かんでいた。その裾野は、刈取られた田園の小川の中まで影を落とし、つり上がった裾野には、赤い点をつけたりんご畑が広がっていた。三三九号線を只管南進するバスの中は、華やいだ雰囲気にも包まれていた。

「団体バスの旅行は「トイレ」「おみやげ店」「食堂」など決っていて、てんやわんやの人の列に、もみくちゃにされ、あっという間に時間切れとなり次へと向かう、効率化、計算性、予測性および制御などの旅は嫌だ。歴史を知り、味わうとする者には、矢張りもっとスローに見物したいものだ。」

ふくよかな色白の顔に、いっぱい幸せの笑顔を作り乍ら女性たちは話し合っていた。

今年の研修は、青森県と秋田県の県境の史跡を散策する一泊二日の旅である。

津軽三関所と津軽三不動

碓ヶ関は名前の通り藩政時代に関所のあったところだ。奥州街道南部八戸領にたいする「野内番所」、鯨ヶ沢一能代をむすぶ西浜街道の秋田佐竹領に接する「大間越番所」、そして羽州街道沿いに佐竹領と相対する「碓ヶ関番所」は、津軽三関とよばれている。

昔、関所だった碓ヶ関は、いま青森・秋田の県境となっている。即ち碓ヶ関は、県境の温泉場として古くからひらけていた。

また、碓ヶ関には、津軽三不動といわれる黒石市（旧六郷村）の長谷沢神社、同じ黒石市（旧山形村）の中野神社と碓ヶ関村古懸にある古懸山国上寺がある。

古懸山国上寺

古懸山国上寺は、古くから「古懸の不動さま」とよばれ、この地方の人々の信仰があつた。

二代藩主信枚が領内鎮護の祈願所とし、津軽真言五山の一つでもあった。寺領二百石も寛永十八年（一六四一）一月には、三代藩主信義が国上寺不動堂を建立している。

寺の由緒については、明治二十六年の火事で古い記録や文書が焼失し、明瞭でないといわれる。

開祖は、大鰐町蔵館の大日堂、弘前市久渡寺の開祖である、円智上人だという。

縁起では、六一〇年（推古天皇）に聖徳太子の命で奏河勝が
亜闍羅（大鰐町）に創立し、建長六年（一二五四）に北條時頼



関所跡



上 番 所

が現在地に再建、二代藩主津軽信枚が現寺名を許可したという。本尊の不動明といえ、一般には立像だが、ここは座像と伝

秋田比内の浅利氏を攻め、大浦城に帰陣する時に関所を設けたもので、明治四年まで続いた。

関所と言え「入鉄砲と出女」の取調べに代表される幕府の関所と異なり、この村の関所は敵の攻めに対する防備の地としてのほか、物資及び人員の移動に税をかけて津軽藩の資金源としていた。またこの関所は、三重になっており、秋田側から来ると、上の番所（峠の番所）、中の番所（折橋の番所）、碓ヶ関の大番所となっている。

昭和五十九年五月に復元された御関所は中の番所があった。現在の国道七号線から国道二八二号線の分岐点の地点である。関所は、秋田側に冠木門（南口）青森県側に高麗門（北門）を建立し、出入口とされており、関所の南番所は、座敷、上番所、下番所、女改めの部屋等と足軽や下役人の控えどころ足軽番所がある。

わが会一行は、無事関所を通過、国道七号線を南へ秋田県へと進む。

長走風穴

国道七号沿いに長走風穴高山植物群落（標高一六〇〜一八〇米）がある。この風穴は、国見山から崩壊した岩石が推積してできた累積型風穴で、石の間から冷気が吹き出している。

真夏に外気温度が三〇℃前後であっても、五〜六℃の冷気が同様の高山植物が生息している。

えられ、「御出汗」があるなどの有名な伝説がある。それは津軽領内に何か変事が起こる一週間ほど前に、不動さまが必ず全身にびっしょり汗をかくといい、出汗すると任職は直ちに藩に急便をたてて報告したという。

廃藩前までは境内に、七間に四間の総ヶヤキ造りの本堂のほか、仁王門、大師堂、稲荷堂、宝物庫二棟、米蔵五つもあったという。その後明治二十六年旧正七日の昼に出火し、伽藍も本尊不動明王も焼失し、以来本格的に再建されず、今はその面影をとどめていない、護摩堂があるだけである。

もしも、昔のままであったなら、国宝級の宝物であったろう。返す返すも残念でならない。

大祭には、有名な「古懸の火性三昧」の荒行が、四年に一度行われており、旧四月八日が参拜日とされている。

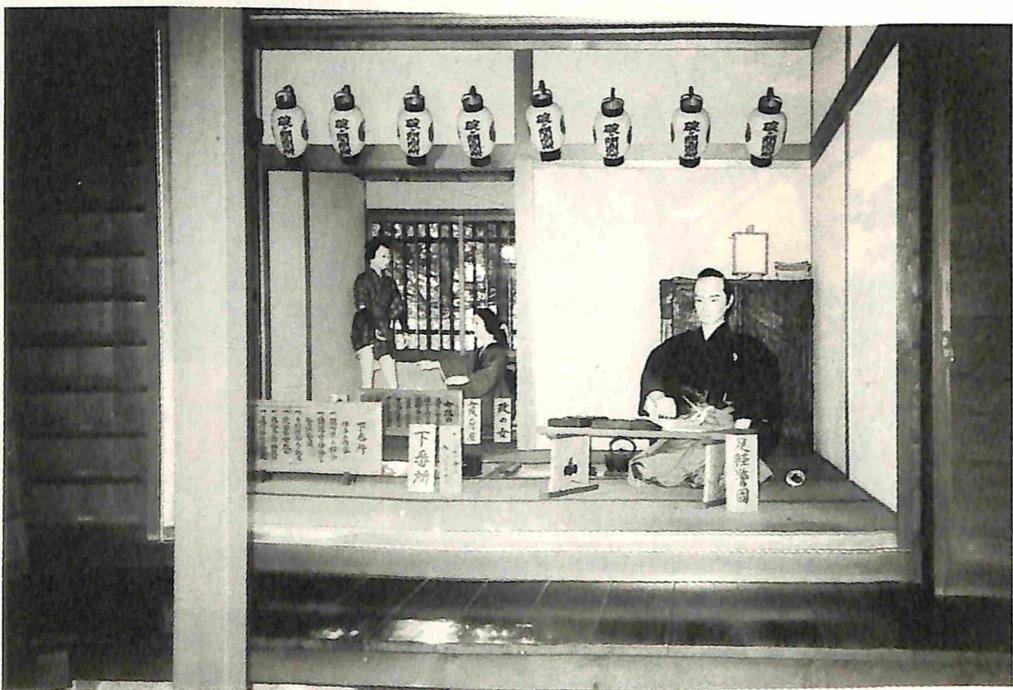
これは常時の勝ち戦の日になっているという話である。

碓ヶ関御関所

羽州街道を切り開いた津軽藩祖、津軽為信によって天正十四年（一五八六）設けられ、明治四年（一八七一）の廃止まで、秋田との国境警備のために津軽藩の表玄関として威容を誇っていた。その当時の生活を再現したのが碓ヶ関御関所である。

当時の人を等身大の人形でリアルに再現した番所など見所がある。

碓ヶ関御関所は、津軽為信公が天正十四年（一五八六）に、



下 番 所

文化庁の天然記念物整備活用事業によって建設された長走風穴館があった。入口に風穴倉庫があり、風穴をどのように利用

していたかを見ることが出来る。風穴倉庫から風穴館に通じる廊下「風の回廊」では、風の不思議が体験できる。風穴館入口脇の木立の一角に「風穴王、佐々木耕治の碑」が建っている。

佐々木耕治は、明治末から昭和の始めにかけて長走風穴を調査研究し天然の冷蔵庫を創設した。と同時に高山植物の愛護も図り、長走風穴は自然の国宝として海外の学会にも知れ渡った。佐々木翁の碑には翁の肖像、そして本文には次の通り刻まれている。「化物屋敷」と呼ばれたこの土地を風穴冷蔵庫と化して国利公益を進め、同時に高山植物の愛護を計って、自然の国宝たる名を海外の学会にまで轟かしたのは、実に翁である。

この功績は、風穴翁がやがて風穴王とたたえられるようになった所以のもので、その裏にはまことに、ヨト子婦人の協力に待つものが多く、六十四年の生涯の後半生の血と涙と汗と金のすべてを打ち込んだ結晶であった。

翁は常に言った。「死んでもやまない。」と。嗚呼、この不屈不撓の精神こそ万代不易なもので、国見山のあらん限り、これが風穴の不思議と高山植物の美しさに照り映えて、永久に後人の心胸に躍動するであろう。

矢立峠

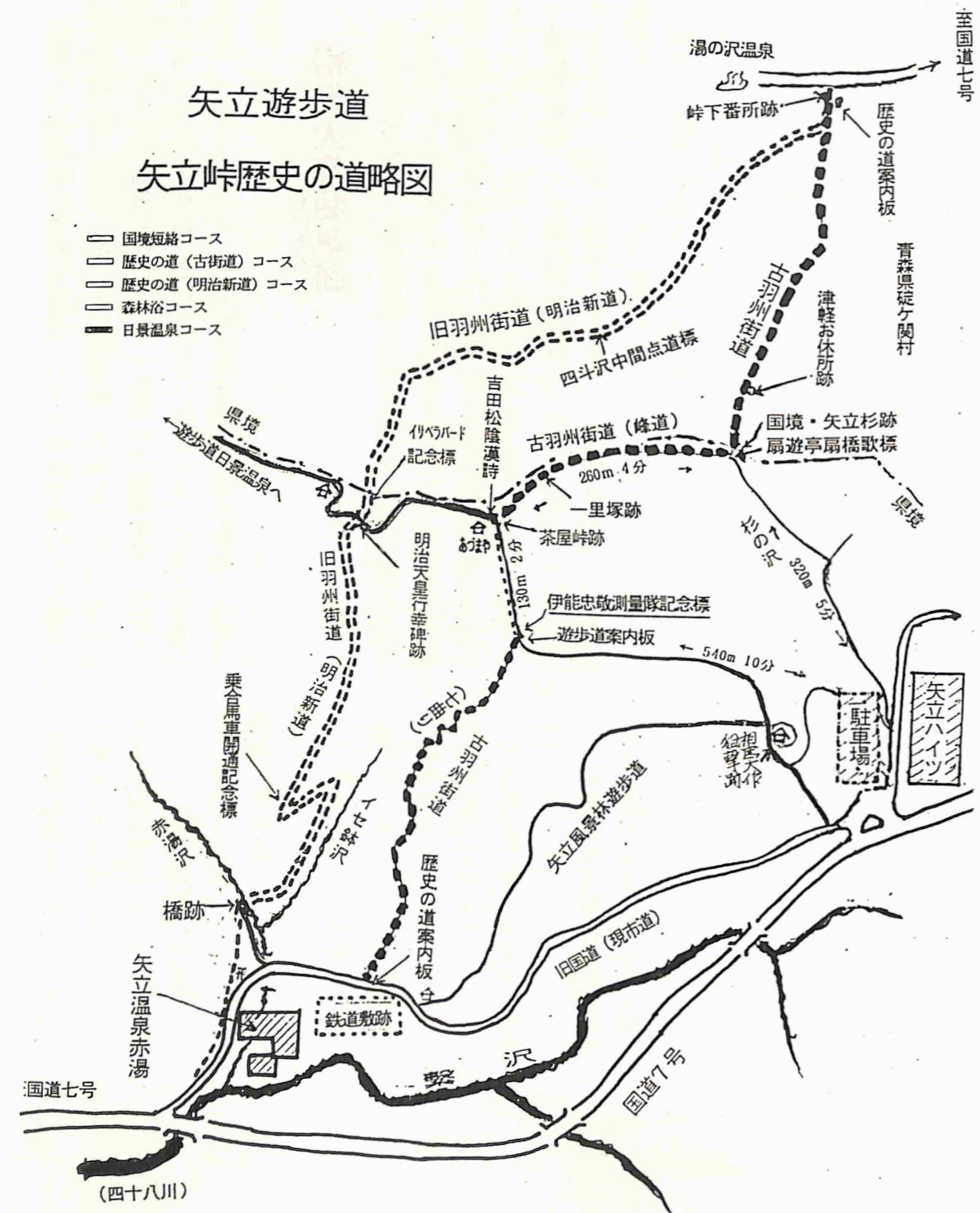
県境の矢立峠は、相馬大作の話で有名だ。今の国道は矢立峠を切開いて通されているが、大作の頃は、

道路は峠の上の方にあった。

国道に面して右側の小高い山腹の中に大館矢立ハイッがあった。



相馬大作狙撃跡



真新しい近代的な建物である。ハイツの駐車場の前に標高六百米の矢立峠があり「相馬大作狙撃跡」の看板がある。細い山道は、右・左と曲折しながら、ツマ先曲りの斜面を登って行く、すすくすくのびた天然の秋田杉は天をついている。山道は落葉が濡れ、「ズルツ」と滑る。十五分位で到着したが跡地の建物は半壊していた。

相馬大作狙撃跡

相馬大作事件は、旧南部藩士の相馬大作が主君利用の怨念をほらそうとした義拳として人びとに語りつがれ、やがて時の経過とともに史実が曲げられ、虚構を加えた多数の著作までできるにいたった。獄門になったはずの大作は替え玉で、彼は、じつは故郷に帰って土地の娘との間に子供が生まれたという伝えすらあるが、義拳の英雄を殺したくない同情心が（かつての源義経のように）これらの脚色をほどこさせたものであろう。

相馬大作は、本名を下斗米秀之進将真といい、江戸に出て名剣士の平山行蔵の弟子となり、その影響を受け、門下四天王の一人といわれた。やがて郷里の福岡（岩手県二戸市）に帰り、北海防衛に役立つ若者を育てようと兵学、武芸、砲術の道場をひらいた。

秀之進はかねて父から、大浦為信はもと南部家の家臣であったのに、津軽を横領して津軽藩として独立したと聞き、義憤を抱えていた。分政三年（一八二〇）十二月、津軽九代藩主寧親

は侍従に昇進したが、南部三十七代藩主の利用は従四位下大膳大夫に任せられただけで、若年のため石高が上にもかかわらず位階は寧親よりも下であった。

かくて秀之進は、翌年四月参勤を終り帰国のため江戸を出発する寧親を狙撃しようとして計画し、弟子の関良助らをつれて秋田領から津軽藩へこえる白沢（秋田県大館市）付近で待伏せしたのである。一五日横手（秋田県横手市）に滞在していた寧親にこの情報が入り、寧親は危険をさげ、西海岸巡視と称して、大間越を通って二九日に無事弘前城へ到着した。

暗殺計画は未遂に終わった。秀之進は相馬大作と変名して江戸の町に隠れ住んだが、ついに捕らえられ、文政五年（一八二二）八月江戸の千住小塚原刑場で獄門（さらし首）に処せられた。

この相馬大作事件は幕藩体制のなかでの津軽・南部両藩の対立を象徴する事件として理解すべきであろう。さて、今日の日程はこれにて一件落着である。陽も大分西に傾いた。天然美林の景観を眺めながらの入浴は、まさに出湯の里である。

参加者 高橋 健一、櫛引八千代、白川 章一、山中長三郎、
小山内トモ子、葛西 敏江、秋元惣之進、石戸谷恵子、
須崎 悠悦、木村 治利

詩

“ 月 ”

仕事帰り 空を見上げたら
白い 月が出ていた

小山内 トモ子

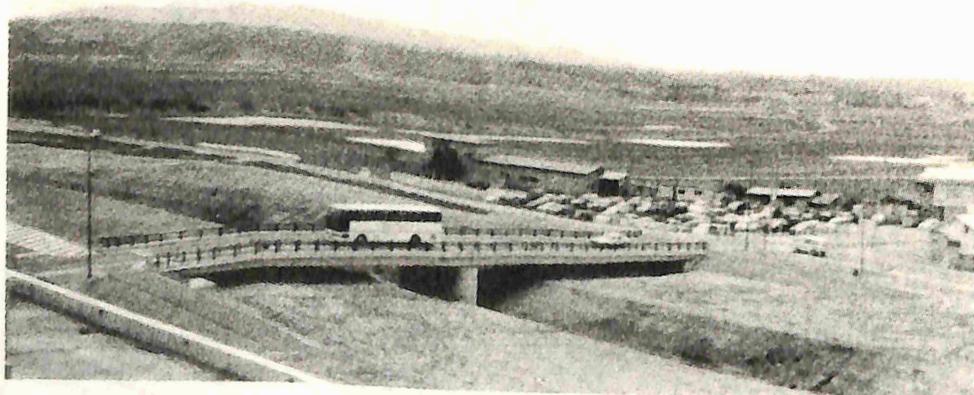
暗くなるのを 待ちきれなくて
夕日の落ちるのを
いまか いまかと 待っている
白い月

どこやら すけて
まぬけているように見える
白い月

月はやっぱり黄色で
夜を明るく
照らすのがいい

その夜は みごとに
明るい月が 出ていた。

平成十四年三月竣工新金木橋
◀（金木病院屋上より写す）



文芸

俳句

「野路の秋」

峰 秀女

春光や何を見据えん仁王の目

物知りのひとり加はる苗木市

夏暖簾やまと言葉のやわらかし

祖は野武士いつかは入る墓洗ふ

吐く息の白より深む野路の秋

俳句

「むかし」

高橋 けん一

田螺和むかしの袋新聞紙

朝湯など親にはなかり苗代寒

この村に馬いなくなり草茂る

新米や納屋にはもはや俵なし

藁塚やむかしの恋の育つとこ

短歌

原 田 喜 一 郎

桜花散り来る園にござ広げ

登山囃子共演賑ふ

葉と蕾共に萌え立ち春風に

めげず咲きたり水仙あまた

幾許の余命知りてか蟋蟀は

かすれ声にて朝までも鳴き

百合の香の漂ふ園に佇ちをりて

虹のしぐさに暫し見とるる

まかげして岩木嶺しかと眺むれば

北帰の白鳥鳴きつつ渡る

短歌

「月下美人」

白 川 哲 子

新春を寿ぐ賀状幾十枚

人柄しのび丹念に見る

菊の根を野ネズミなべて噛りしと

時じく植ゆ花は咲きたり

月下美人伸びは止らず天窓に

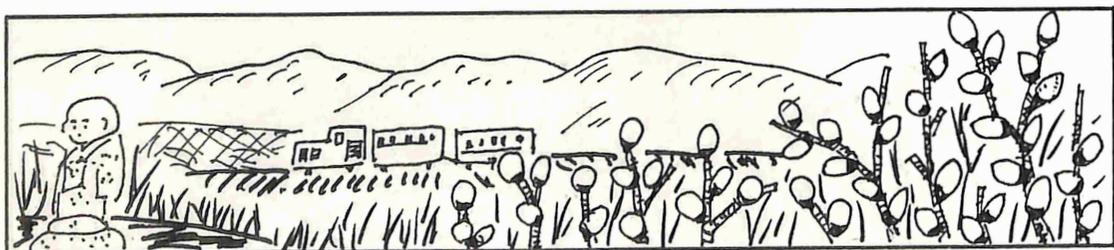
触るるを恐れ紐で結びぬ

忙しかる職持つ娘病持つ

われを気遣ひ奇薬持ち来ぬ

いく十年欠席のなきクラス会

病に倒れ今年欠席



短歌

「姑逝きて」

榎引 八千代

いづこより飛び来し桜の花びらか

植田にたゆとふ淡きひとひら

安らげき寝顔のままに姑逝きて

夜の明けやらぬ師走のさ中

黄泉へたつ師走の風は冷たかろ

柩に入れし姑の襟巻

茶毘に付すこの世の名残り断つごとく

姑の柩の扉を閉づる音

蟻のごと齷齪生きて呆けたる

姑を弔ふ和讃哀しも

短歌

歳月

岩田 重美

元旦の風呂に浸りてしみじみと

八十余年の歳月思ふ

われながら不出来と思ふ即席の

料理を笑ふ風邪ひきの妻

共逝きて取り壊されし家跡に咲く

あじさゐの色あざやけし

一匹の蛸も見ずに過ぎたと

日記に書きぬ長月も半ば

小泊の浜の朝市生きながら

売らるる魚空を見てをり

川柳

「麦畑」

成田 チセ

天衣無縫あなたと二人麦畑

次の世へチャンネル変えてみたくなり

斬られても信念曲げぬ雑魚の意地

宿帳に妻の匂いのない女

あこがれて行く都会にも鬼がいる

川柳

「人生」

榎引 八千代

うっとりときさせる言葉に裏がある

葦そよぐ今さら何をそそのかす

帰れない靴がふる里ばかり向く

人生はこんなものさと葱きざむ

機が熟すまでは一途な蟻となる

